第１回研究会

パターンが決めるランドスケープの機能

名古屋大学大学院環境学研究科教授・里山学研究センター研究員
夏原　由博

生態学の目的は生物と環境の相互作用のプロセスを明らかにすることである．生物の分布は生育場所内の要因によってだけでなく，その周囲の状態によって影響を受ける．また，森や水田などそれぞれの生態系は相互に影響しあっていて，切り離すことはできない．ある一定範囲に，森や草地，水田など種類の異なる生態系や土地被覆の集まった不均質な空間をランドスケープ（景観）と呼ぶ．景観生態学は，景観パターンとプロセスの相互関係に注目した研究領域である．パターンは森林であるとか草地であるというランドスケープ要素やそこに分布する生物の種類と配置あるいは時間的変動，そしてプロセスはそうしたパターンを作り出す，水流による侵食，生態系間の生物の移動といったものである．

人間がランドスケープを変化させることによって生じる生物への影響は，⑴個別の種にとっての生育場所の消失・孤立化と⑵ランドスケープパターンの変化が生態系プロセスに及ぼす影響とに分けて考えることができる．森・川・海のつながりを断ち切った結果，アユがとれなくなってしまった．逆に，本来行き来のなかった海外の生物を持ち込んで，在来種への脅威となる問題が拡大している．

里山では，集落，水田，草地，日常用の雑木林，長期間維持して建材を育てる奥山といった，半径数kmの範囲から資源を得て，暮らしが維持されてきた．それが独特の景観と文化を作り出し，そうしたモザイク景観を好む生物の生育場所となった．近代化によって，暮らし，文化，生態系のすべてでモジュール構造が変化した．そうした変化が持続的であるかどうかが疑問視されている．大きくなってしまったエコロジカル・フットプリントがそれを物語っている．空間を考えることが，豊かな地球を未来に残す鍵となるに違いない．